

東区幼保小連携推進協議会便り



令和3年度第1号 2021.7.9発行 東区幼保小連携推進協議会代表者会

令和3年度1学期が間もなく終わろうとしています。昨年度からの新型コロナウイルス感染症拡大により、今年度の「第1回東区幼保小連携推進協議会」は、アンケートによる書面交流にしました。東区内の園、小学校の皆様には、アンケートに丁寧に御回答いただき、コロナ禍の只中であっても子どもたちの生活や学びを止めないために、苦慮しながらも配慮、工夫してこられていることがありのまに綴られていました。

幼保小連携推進協議会の本来の在り方は、子どもを中心において関係者が直接顔を合わせ、幼児期から児童期への接続について学び合い、語り合っよりよい方向を見出すことです。しかし、いまだ、多くの人数で安心して集まることが出来ないのが現状です。子どもたちの健やかな育ちを保障するためにも、ぜひ園内や校内で回覧、共有いただくとともに、他園、他校の情報をもとに自園、自校の取組の改善につなげる語り合いのきっかけとしていただければ幸いです。今年度も、幼保小連携推進に御協力いただきますようお願いいたします。



幼稚園、こども園、保育園



1. 5歳児の様子（現在の様子、コロナ禍における保育の影響と具体的な姿）

◎ 進級して意欲的に生活している

- ・年長になったことを喜び、年長ならではの遊びや活動に取り組んでいる。保育者は、自分のことは自分ですることに達成感や誇りを感じられるように配慮している。
⇒意欲的に過ごせるよう環境設定や援助、関わりの配慮をしている。
⇒自己肯定感を育むことを大人がしっかり意識し、言葉で伝えたり関わったりしている。
- ・昨年からの感染症対策の継続で、感染症のことや社会の状況について5歳児なりに理解し、手洗い、消毒などの習慣が身に付いている。園での遊びや生活を通して、幼児自身が昨年度からの感染症対策下の状況に慣れており、特に影響を感じない。
- ・戸外遊びや、存分に体を動かす遊びなどを多く取り入れ、心の安定や健康面に配慮している。

◎ 異年齢とのかかわりや大人数での活動、行事などを控えながらも…

- ・「年長になったらできる」と楽しみにしていたことが出来ないことを残念がる一方で、コロナのことを幼児なりに理解して、諦めたり前向きに考えたりするなどの様子がある。
- ・まん延防止等重点措置や緊急事態宣言以降、家庭保育への協力依頼、休園、分散登園などをしていた園が多くあった。少人数での保育となり、密にならずに遊びが保障できた。個々にじっくり関わることができ、落ち着いた保育が実現できた。クラス単位での活動が多くなり、仲間意識が強くなった。
- ・例年通りの活動や行事ができない分、たくさんの思い出ができるよう工夫して保育を計画していることもあり、日々の活動や遊びは充実している。

◎影響あり!～友達関係の築きにくさ、集団経験

- ・我慢や制限が多くなり、家庭保育で欠席が多い幼児はストレスや不安感が大きくなっている様子がある。イライラしやすい、友達とのかかわりで些細なことで怒るなどトラブルが増えていることが気になり。
- ・家庭保育への協力などで全員が揃わず、仲の良い友達が欠席して遊び込めない、友達関係が築きにくいなどの様子がある。登園している幼児との経験差が心配。(保護者の不安の声も聞かれている。)
- ・子ども同士で相談したり、学級全員で目標に向かって取り組んだりするような経験が積み重ねにくい。全体や複数人での取り組みが苦手な様子がある。

◎影響あり!～ストレスを感じている様子、保護者対応・・・

- ・我慢や制限が多くなり、家庭保育で欠席が多い幼児はストレスや不安感が大きくなっている様子がある。友達とのかかわりで些細なことで怒るなどトラブルが増えていることが気になり。
⇒個別の配慮や家庭への配慮が一層必要になっている。
- ・行事の変更、中止、縮小を余儀なくされ、保護者が来園できず子どもの様子を十分に伝えられない。まん延防止等重点措置や緊急事態宣言下では、送迎時に保護者は園内に入らずに玄関対応しているため、コミュニケーションが十分にもてない。保護者同士のかかわりの機会も少なくなっている。
⇒ブログやホームページなどで保護者に園の様子を伝える工夫をしている。

◎影響あり!～食事や食育、経験の幅が広がらない

- ・食事中は対面にならないようにし、“黙食”の指導をしているが徹底が難しい。幼児期に経験させたい友達や保育者と会話を楽しむなど「楽しく食事をする事」ができず、園で“孤食”を生み出してしまっている。
- ・「(給食時に)自分で配膳すること」や、食材を見たり触れたりする経験として行ってきたクッキング(調理の経験)の機会がもてず、十分な食育ができないことが残念。
⇒幼児期(乳児期も含む)にふさわしい食育をどのように保障するか悩みは大きい。

2.感染症対策を考慮しながらの園生活や遊びの保障のための工夫、課題

◎遊び、行事の工夫と課題

- ・多くの園で、戶外遊びを多く取り入れて体を十分に動かせるようにしている。さらにブースやコーナーを設ける、砂場の人数制限をするなどして密を避ける工夫をしている。
 - ・夏場になり熱中症対策でマスクを外した際の配慮が課題。
 - ・散歩、園外保育の工夫・課題～他の園が来ている時は別の場所に移動する、遊ぶ前に遊具を消毒するなどして経験の機会を保障している。
 - ・集団で行う遊び、ゲームなど子ども同士の接触や距離が近くなる場面での対応や判断、気持ちが高まったときの声の大きさに不安を感じる園もある。
⇒声の大きさを意識できるよう視覚カード等を使って知らせている。
 - ・歌を歌う活動が難しく、集団で一斉に歌うことを止めたり控えたりしている。音楽活動や表現活動をどのように進めるか課題となっている。
 - ・近隣の施設や学校、地域との交流がもてないため、園以外の場や世界について知らせる工夫が必要。
 - ・運動会など保護者の参加の仕方などについては、今後の課題。
- ☆制限された中でどう楽しく学び、生活ができるか、行事などをどのように実施するかを職員間で十分に話し合うことで、「ねらい」「経験させたいこと」など保育の見直しをすることができた。

◎感染症対策の具体、工夫、課題は？

- ・家庭への登園前の検温、健康チェックの依頼。手洗い、消毒、換気、学級活動や行事、食事などの際の席の間隔の確保、学級単位での活動、遊具の消毒や清掃の徹底。対策に必要な環境や方法は定着してきている。
⇒対策の徹底で、以前の保育と大きく変えていない園もある。
- ・3歳以上児のマスク着用～園によって家庭への協力依頼の方法や程度が異なり、園児数や環境面の違いなどに応じて判断。年長児には、マスクを常時着用しての学校生活に向けて習慣化の必要性を感じつつ、着用に対する家庭の認識の差があったり、マスクに苦手さを感じる幼児がいたりなど苦慮している。
- ・保育者は常時マスクを着けていて、表情で伝えることが出来ない。園児もマスク着用していると、互いに表情で伝えることや相手の表情を読み取ることが難しい。（表情を読み取る力が付きにくいのではないか心配。）
⇒話し方に抑揚をつけたり、身振りを大きくしたりするなどの工夫をしている。
- ・こども園、保育園ならではの課題として～本来は、接触の範囲を狭めるために乳児と幼児が交じり合わないよう保育したいが、職員の体制や時間帯によって園児も職員も重ならざるを得ず苦慮している。

小学校

1年生の様子（現在の姿、コロナ禍の1年間を過ごしてきた影響を感じる姿）

◎1年生の様子…学校生活への適応（学校によって実態や状況の差があるもの…）

- ・ゆるやかなスタートカリキュラムの実施、担任だけでなく担任外や学びのサポーターが一丸となって丁寧に指導に当たったことで、コロナ禍の影響を感じる姿は見られない。落ち着いた様子の児童は、学習や生活に向かう前向きな姿勢や意欲が見られる。
- ・学校に慣れ、休み時間など、元気にのびのびと走り回ったり戸外に出て遊んだりしている。
- ・遊びを通して、試したり工夫したり、友達と協力したり、思いを伝え合ったりする姿が見られる。
- ・約2か月で、学校での生活リズムが確立してきている。集団行動、規律を守る大切さが分かっている。
- ・身の回りの整理、給食の準備、教室清掃などが習慣付いてきた。
⇒高学年にやってもらっていたことを自分たちで行うようにしている。
- ・給食時の黙食が徐々に身に付いてきている。

◎影響あり…児童同士の触れ合い、異学年交流、縦割り活動ができない

- ・6年生など上の学年との触れ合いや交流が希薄になり、学校のルールや上の学年の姿を見て学ぶことが出来ない。多様なかわりの機会がもちにくく、人間関係の構築の困難さを感じる。
- ・マスクをしていることで表情が読み取りにくく、相手が嫌がっていることに気付かずやりすぎたり言い過ぎてしまったりする様子が見られる。今後どのように影響してくるか見極めなくてはならない。

◎影響あり…コロナ禍の1年を過ごしてきた影響？

- ・集団活動、行動、学習意欲や能力の面で困りを抱える児童が見られる。（授業中落ち着かない、立ち歩こうとする、母子分離が難しい、感染症予防へのストレス など）
⇒個人差、児童の特性、昨年度の休園期間の影響もあると思われるが、現段階では要因などについて判断しきれない。個別の対応、家庭との連携が必要となっている。
- ・マスク着用の習慣や正しい付け方が身に付いていない、または嫌がる（すぐに外してしまう）児童がいる。
- ・1年生では体力低下、高学年では運動機能や持久力の低下を感じる。
⇒感染症対策下でも、体験的学び、運動の機会の保障と工夫が必要。

◎コロナ禍とは別の要因…

- ・入学2か月頃は、子どもの特性による学校生活での困りが表れてくる時期。
⇒様々な工夫を加えながらすべての子どもに学びの場が確保されるようにしたい。

2. スタートカリキュラムを実施しての成果と課題、特に留意していること

◎ゆるやかに小学校に慣れる工夫～生活のペース、時間割の組み方、教師の関わりや体制づくり

- ・身の回りのことは、個人差も考慮して時間を長めに取って自分でできるように。生活のルールに関することは、紙芝居やクイズ形式にする、掲示物を活用するなどして分かりやすく指導。
- ・モジュールで時間割を組み立て、短時間から少しずつ座っての学習時間をのばしていくようにしている。一方で、子どもたちの願いや学習への意欲に応じて、柔軟な時間の組み立てにし、場合によっては子どもの意欲を尊重し、2時間続きの学習活動にすることもある。
- ・担任だけでなく、担任外、T・T、学びのサポーターなど多くの教職員など複数の目で対応している。個別の実態や困りに応じた指導ができるようにしている。

◎読み聞かせ、手遊び、歌など遊びの要素を取り入れて

- ・生活科を中心に、合科的な(いろいろな教科を合わせた)指導を行い、学習への興味・関心を高めた。
- ・読み聞かせや手遊びなど遊びの要素を織り交ぜて、楽しんで学習できるようにした。また、学習内容を、絵や写真で掲示して見通しをもてるように、教室の環境を工夫した。
⇒幼児教育との連続性を考慮したスタートカリキュラムの実践
⇒「学校へ行くのは楽しい」という気持ちの育みや楽しく意欲的に学習する姿につながっている。

◎幼児期に育まれた年長児としての自信や意欲を引き出す工夫

- ・できるようになっているであろうことを“引き出す”関わりを心がけている。
- ・学習の目当てや見通しをもたせることで不安を取り除きながら、励まして自信をつけるような援助や関わりを工夫している。

◎課題…スタートカリキュラムが学校全体で共通理解され、その年の子どもの実態に合わせて実施されていくようにするためには、幼児教育施設との連携や学び合いの継続が必須。

共通項目

○ 幼児教育施設と小学校で相互理解を深めたいこと



◎互いの施設での学びや生活の実際を知るために

- ・幼児教育施設で「どのような内容の活動、遊びを行っているのか」「どのようなことに配慮して活動を行っているのか」など、幼児教育への理解を深め、その上で幼小の効果的な連携の形が見えてくるのではないかな。
⇒小学校から幼児教育施設への訪問や参観など、保育の実際を知る機会が積極的になってほしい。
- ・小学校の生活、学習の実際(1年生に求める姿、通常の学級、特別支援学級の様子や取組など)、園での遊びや育ち(非認知能力の育みや園で配慮していることも含め)がどのように生かされているか。
⇒幼児期にふさわしい生活や学びの在り方から小学校での学びへの接続の在り方を学び合いたい。主体性を大切にする幼児期教育が小学校生活につながっていくことを願う。
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を基にした成長の事例を知りたい。
⇒「10の姿」を視点として子どもの姿や手立てを交流することで、幼児教育からの接続を考えていける。

◎コロナ禍における連携・交流の実現のために～

- ・小学校への訪問や交流が出来ず、年長児(保護者)は学校や就学のイメージがもてていない。教職員同士の交流や学び合いを継続していく必要性を感じる。
⇒幼児、児童～手紙や写真、ビデオレターや ZOOMなどでのやり取りや対面など、できることを実現したい。
(小学校はこういうところ、どんな学びや活動をするかなど小学校生活の雰囲気を知れるとよい。)
⇒交流の計画を小学校に主導してもらいたい。
⇒教師同士～オンラインでディスカッションの機会をつくりたい。気軽に相談し合えるとよい。

◎就学に向けて、引継ぎの在り方について

・幼児教育施設から…

～入学当初に困りそうなこと（生活リズム、生活習慣面、マスク着用の習慣、トイレの使い方 など）、保護者への入学の心構えや準備の周知の仕方について知りたい。

⇒就学前に小学校の先生に保護者向けの懇談会で小学校生活について紹介してもらう方法もある。

～自分で考えて行動したり、自分の思いを相手に伝えたりすることができるようにしておきたい。

～気になる子の様子などを園に見に来て行う引継ぎは有効。要録に記載しきれない子どもの姿に加え支援の方法や具体的手立てなどについても丁寧に引き継ぎたい。

・小学校から…

～引継ぎを密にすることで学級編成や、入学後の指導やスタートカリキュラムに生かすことができた。幼児教育施設と小学校それぞれで付けたい力を知ることが必要。

～1年生の学習の様子、小学校での取組内容や学校の保護向けの周知資料などを積極的に発信したい。

・入学後の子どもの様子を見たり情報共有したりする機会を継続的にもつことで、より良い接続につなげていけるのではないかと。入学当初だけでなく、学年が上がってからの姿や課題も共有したい。

◎就学した子どもの情報共有の充実に向けて

・保育園など少人数の集団から人数の多い学校への就学した場合や、環境が大きく変わることによって不安感を持ち、困りや課題が出てくるのが予想される。細やかな情報交流や意見交換がポイントとなる。

⇒小学校でのありのままの様子を見たり、教職員同士が対面で情報共有したりできることが望ましい。

◎令和3年度の取組～地区、近隣の施設同士が知恵を出し合って直接つながりましょう！

コロナ終息を待っている間も、子どもたちの学びや成長を止めるわけにはいきません。今回のアンケートで、各園、各校で「何か動き出さなくては。」という熱い思いが伝わってきました。数少ない協議会の機会だけでは、できることに限りがあります。子どもたちのために「実践」していくことで、東区の幼小連携・接続の歩みが進んでいきます。本通信の内容を参考にしながら、まずは、「実践」してみましょう。

令和3年度の 代表者です。どうぞよろしくお願いいたします。

札幌市立札幌小学校	校長 神谷 かほる
天使幼稚園（札私幼）	園長 近藤 よしみ
認定こども園せいめいのもり（札私幼）	園長 司馬 政一
認定こども園伏古かしわ保育園（私保連）	園長 河合 直嗣
東区保育・子育て支援センター	所長 小西 敬子
札幌市立ひがしなえぼ幼稚園	園長 菅原 由美

代表者会の私たちも、なかなか顔を合わせられず、メールや電話を駆使して運営に当たっています。皆さんと「ともに」できることを模索してまいります。

<第2回 東区幼保小連携推進協議会について>

日時：令和3年8月26日（木） 15:00～16:45

開催方法：オンライン（ZOOM） ※安心して参加できる方法にしました。

内容：全体研修

「スタートカリキュラムを通して、
幼児期の育ち（10の姿）を踏まえた円滑な接続について考えよう」

講師：北翔大学教育文化学部 教育学科 教授 磯島 年成 氏

※詳細は別紙案内通知をご覧ください。

